

いま世界史をどうみるか

鳥山孟郎氏

今回は都立町田高等学校教諭でありかつ歴史教育者協議会研究委員である鳥山孟郎氏を御招きして「いま世界史をどうみるか」という題で講演をして頂いた。

町田高校で教えていること、普段考えていることを話したいということで内容は次のようである。

九一年は湾岸戦争、従軍慰安婦などを歴史のなかでどうとらえるのが重要な問題となった。それらは今までの考え方でとらえることができない。

今までの歴史学は古代奴隷制↓封建制↓資本主義↓社会主義という発展史観が大きな影響力をもっていたが現実において社会主義体制は消滅しそうになっていて、このようなとらえ方で歴史をとらえることができるのか疑問になっている。また現実の今の社会をどうとらえるかということが大きな問題となっているのである。つまり今までの歴史観は生徒をとらえなくなってきたのである。

今までの日本の中にあつた一つのとらえ方は「西洋に学び、東洋を支配する」ということであつたが、それは慰安婦問題を機に大きな打撃をうけている。またそれとは別に、ここ十年ぐらい前からかなり広がってきた考え方に「経済大国にふさわしい国際貢献を」というのがあるが説得力があるとは言い難い。

これから世界史をどうみるか、その参考になるものにL・S・スタヴリアーノスの『新・世界の歴史』（一九九一年刊、桐原書店）がある。そのなかでスタヴリアーノスは一般的な発展史観、段階論とは違って、環境、男女関係、社会、戦争といった視点から世界史を見ている。彼は歴史を進歩の歴史ととらえるのはヨーロッパのしかも最近の発想であると考えている。インドや中国においてはそう

でなかったし、ヨーロッパにおいても中世においては違う歴史観があつたのである。しかしながら、従軍慰安婦や強制連行、湾岸戦争における日本の選択といった問題はスタヴリアーノスの著書では解決できない。これはあくまで北米工業社会中心の世界史像といえる。

それぞれの地域のかかえる問題によって世界史像は異なってくるものである。地域の場合から世界史について考えたとき、何がみえ、何が問題になるのか。

五、六年前から町田高校で公開講座「アジアの人々と日本」を開き、朝鮮やインドシナ難民の方に話してもらっている。

その中で私にわかつてきたことはどういうことかというところ、朝鮮の人々は日本人から差別を受けていることは別の問題があるというところである。「自分の両親が朝鮮人であることがいやでいじめようがない」という気持ちをもつということである。それはいじめられるとは別の問題であつて、普段は日本人との違いを意識しないのに、親のことが食べ物からそのことを意識させられるということである。インドネシア難民も子どもは学校にインドシナ風の弁当をもっていくことをきらうことになる。自分が違うという意識を普段もたない子どもたちはいやおうなしにそれを意識させる者として親をさらう。だからこそ朝鮮の人々、インドネシアの難民の人々も民族性喪失を自覚し、それに危機をいだいており、それが大きな問題になっている。

次に授業の話をしてみたい。

国連について日本には「国連崇拜」があり、それがPKO批判の声を弱めており、国連をとるか、憲法をとるかといった場合、憲法

は理念的にとらえられ、現実的には国連をとるということになる。朝日新聞の記事（一九九二年三月一二日夕刊、内容は元国連職員であった吉田康彦氏とのインタビュー記事であって、吉田氏はそのなかで国連を駆け込み寺扱いするのは疑問、「国連崇拜」を卒業せよなどと語っている）を読ませての生徒の感想をみると、国益を追求していく上で、他国と協力しあっていくことがなくてはならないという発想がない、国益を追求することが他国と争うという発想である。授業で石橋湛山の「満州を手に入れることは中国と仲が悪くなることになり、国益にかなうとはいえない」という言葉を紹介しているが、そういう見方が生徒には弱い。

最後にアジアの国々の交流の中でどのような問題が生じているのか紹介したい。東アジア教育シンポジウムが一九八四年と八九年に開かれ、そこでは三つのことがテーマとして話しあわれた。それは(1)日本の戦争責任、(2)民族をどうとらえていくか、(3)東アジアにとって近代化がなんであったのか、である。

日本の側に一体何が問われているのだろうか。

(1)については、加害の事実を明らかにすることとあることであって、これ抜きに不信感をぬぐいきることができない。強制連行、従軍慰安婦、南京大虐殺などの被害者の救済のための措置を過去の条約ですましてよいのか、主体的にどう答えをだすか問われている。しかしながら授業で、従軍慰安婦、強制連行の話などを三時間、四時間もすると「そんなにやっていったいどうしようというのだ」という生徒の疑問が出てくる。この生徒の反発は何故そういうことを学ばなくてはならないかという自覚がないことからきている。では生徒にはどういう自覚がもとめられているのか。それは日本が二度とあのような戦争をしないということであるが、もうひとつついでいくと、これからの日本がアジアの中でどのような役割を担っていかなくてはならないのかということを考えることから「意味」が見えてくる。

(2)については、なにを問題にしていくべきかを考えるとき、二つ

のことがある。ひとつは世界には様々な異なる民族があって、それぞれの生活を営んでいる。この異なる文化・伝統をもつ者たちと日本はどのように接していくことができるかということと、もうひとつは国際的な課題にとりくむ主体として自分がどこに身を置くべきかということである。

(3)については、ヨーロッパの近代をどう主体的に受けとめるべきかということが言える。朝鮮の場合、民族の統一、民主化の課題があり、中国においては五つの近代化、民主化の課題がある。そのなかでアジアを犠牲にしての近代化は日本にとってまずいであろう。

(青山永久)

